

## 大腸憩室症

腸の壁の一部が外に突出したものを憩室（けいしつ）といいます。大腸などの腸管内の圧力が高くなり、腸の壁の弱い部分（血管が筋層を貫く部位）に粘膜が脱出した状態のことです。したがって、腸管の柔軟性が低下している高齢者に多くみられます。60才以上では、約15%に大腸憩室があるといわれています。

大腸憩室が全消化管の中で最も多くみられます。他部位の憩室と異なり、合併症（出血、炎症、穿孔、膿瘍）を起こしやすいのが大腸憩室です。

わが国は、欧米に比べて頻度が少ないとされてきましたが、わが国における食生活の変化、特に食物繊維の摂取量の減少により、大腸憩室が増加しているといわれています。



オアシス第一病院  
院長 日野 晃

## (1) 憩室出血

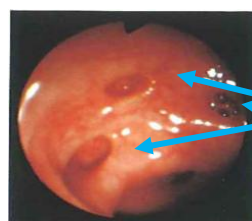
ほとんどは、腹痛等の症状を伴わず、暗赤色、ないし鮮紅色の下血がみられます。

大腸内視鏡検査や造影CT検査を行い、内視鏡的に止血するか、場合によっては血管造影を用いた塞栓術、あるいは外科的治療（手術）が必要になる場合があります。

## (2) 憩室炎

腹痛が、主な症状で、若い人は右側結腸に、高齢者では左側に多いとされています。

CT検査が診断に最も有用とされています。治療は、入院下に、絶食、輸液、抗生物質の点滴を行います。膿瘍形成、狭窄、瘻孔を形成した症例では、手術になります。



憩室



憩室



ほとんどの症例が手術をせずに、絶食、点滴等の治療で軽快する疾患です。  
常日ごろ、便秘をしないように、また暴飲、暴食、過労、ストレスを避けるように、  
こころがけることが重要です。

当院の診療放射線科は放射線技師4名で院内の全ての（オアシス第一・第二・外科乳腺外科など）撮影業務を行なっています。放射線室では、X線撮影・造影検査をはじめCT・MRIなどを用いて診断と治療のサポートにつとめています。最近では5月に導入されたマンモグラフィ撮影装置も加わりより充実したモダリティーとなっております。

撮影には、全面CR（コンピューテッド・ラジオグラフィ）・DR（デジタル・ラジオグラフィ）化しています。そのため院内で発生した画像（X線・CT・MRI・エコーなど）は、全てを一括ファイリングリアルタイムで各科診察室、各病棟へ参照画像として転送、各種画像を時系列で表示し対比診断することも可能となり各科の臨床診断を画像診断の立場からサポートし、より確実な確定診断に結びつきます。紹介患者様に対しては、CT、MRIについて連携用の枠を確保しており、撮影、画像処理、CD-ROMに加工して放射線科専門医師による画像診断、報告書作成をいち早く行っています

昨今、患者様の方が放射線にかなり敏感になっておられるため、インフォームドコンセント（説明された上での合意）の重要性を再認識しています。例えば、ごく一般的なX線写真を撮影する際に、何のために、どこを、何枚撮影するのかということをしっかり納得していただけるよう心がけています。もちろん、放射線科の最も重要な仕事は、患者さんのための的確な検査データをスピーディーに提出できるよう努めることです。日頃から、検査の安全と被曝低減（必要最小限の撮影数）を守りながら、より精度の高い画像を提供することに努め、同時に検査の効率化を一層進めることで患者さんのニーズに応えていきたいと考えております。

放射線科科長 竹中秀文



お問い合わせ  
医療法人善昭会

オアシス第一病院

〒870-0103 大分市東鶴崎3丁目3-19

電話 097-527-2211 Fax 097-522-0511

